

世界紀行文学全集

19

海洋編

世界紀行文学全集

19

海洋編

監修―志賀直哉●佐藤春夫●川端康成●小林秀雄●井上靖

ほるぷ出版

世界紀行文学全集 第十九卷

海洋編

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社ほるぷ出版

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森蔭人

総発売元

株式会社ほるぷ

東京都新宿区新宿二十九十三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目 次

末広鉄腸	太平洋の船中	三
巖谷小波	さゝ波日記	九
島村抱月	海上日記	七
高村光太郎	雲と波	三
戸川秋骨	太平洋三十日記	三
新村出	南十字星	三
中村吉蔵	太平洋航海日記	五
上田敏	太平洋上にて	五
三宅克己	海洋紀行	五
寺田寅彦	アラビア海から紅海へ	七
与謝野晶子	地中海	七
小杉放庵	海洋紀行	八
森田恒友	船中より	八
徳富蘆花	印度洋	九
岡本綺堂	秋	一〇
河東碧梧桐	船中生活	一〇
成瀬無極	同船の人々	一〇
橋本関雪	北野丸の船室より	一二
小出檐重	帰船	一四
木下杢太郎	地中海上	一六
	諏訪丸にて	一八

茅野蕭々
土岐善磨
石川達三
竹内勝太郎
市河三喜子
林芙美子
久松潜一
高浜虚子
横光利一
島崎藤村
小泉信三
武者小路実篤
山口青邨
野上弥生子
石川欣一
高柳賢三
田中耕太郎

伏見丸より……………	二二
大西洋を越えつゝ……………	二三
海洋紀行……………	二七
太平洋の旅……………	二八
帰国……………	二九
二篇 大西洋の夏……………	三六
三等船室雑話……………	四〇
船中雑感……………	四一
南支那海……………	四二
紅海に入る……………	四三
紅海……………	四四
海上日記……………	四五
海へ……………	四六
一七 地中海の旅……………	四九
東洋の港々……………	五〇
渡米日記……………	五一
出発からマルセーユまでの船中にて……………	五二
三〇 大西洋上にて……………	五三
太平洋航行船中にて……………	五四
南海とところどころ……………	五五
二五 満州だより……………	五六
アレクサンドリアからナポリへ……………	五七
二六 印度洋でのお正月……………	五八
ブレーメンとノルマンディ……………	五九
太平洋……………	六〇
二七 大西洋……………	六一

村松嘉津 帰仏日記……………三六九

岡本二平 画と文……………三六九

紅海 一六 新嘉坡の銭投げ 二九 コロンボ 七七 印度洋 九三 揚子江 一〇四 刺った越中禪 一三一
一三二 香港 一五七 新嘉坡(二) 一八一 新嘉坡(三) 一九八 香港 二六四 支那芝居 三〇九
コロンボ

執筆者・出典一覧……………三三三

海

洋

編

泰平洋の船中

末広 鉄腸

「オーイ己の部屋は何処にある……事務長は居らぬか十八号の部屋には人が居るぞ……荷物はいいかと声を立て乍ら群衆を押退け頻りに騒ぎ立てるは年の頃三十内外と見ゆる紳士なり身には新たに調えしと覚しき「モーニングコート」を着し頭に黒の高帽子を戴き胸のあたりに金鎖を垂れ日本人の目から見れば中々立派なれども西洋人は一目して其の身形の何処となく野鄙にして不恰好なるを見出すならん是日の朝十時に汽船ベルジック号は横浜を發して「サンフランシスコ」に向うことなれば八時前後より内外の紳士商人を始め阿米利加へ赴かんとするものは小蒸汽又は「バッテリー」にて本船に馳せ付け其の前後左右の木葉をまきちらせしに異らず其の上旅客の親戚知己などは孰れも別離を惜み本船まで見送るものも少なからず客室を始め甲板の上は真黒に人山を成せり左舷にては許多の水夫が器械にて端舟の上より荷物を引上げて舳内に積み其響きガタガタとして耳を驚かし阿米利加へ出稼ぎする支那人も幾百名となく乗り込みし

ことなれば船中の騒がしきこと名状すべからず「モーニングコート」を着せし紳士も許多の友達に送られ小汽船にて此の舟に上り手に十八号と記したる切符を携え同号の部屋を尋ねれども如何なる間違にや十八号の部屋は既に客が入り込んで中よりピッシリと戸を閉たり此の紳士は少も英語が出来ぬ様子にて今本船まで見送りに来れる朋友に通弁を頼み「チーフスチワード」(小使長)を呼出して掛合を為せども事務長が居らぬから帰るまで待てと云うのみにて何時まで立つとも部屋が定まらず早其内に本船を取巻く小舟は次第に帰り去り船中の役人共は頻りに手を揮うて一同の退去を促しが最早出帆の時刻に近きし様子なれば紳士の友達共は不安心と思ひながら仕方なく早々に暇乞して階子を下り小蒸汽に乗込み横浜を差して馳せ去れば跡に紳士の独りボンヤリとして其処に立ちしが船中には一人の知匠も無く事務長に逢うて掛合を為さんにも英語が出来ず泣きそうな顔付を為し心の内に「コンナことと知たら一船や二船延しても英語の出来る人と同行するのであつたに」と後悔するも其の毒千万なり抑も此の紳士は如何なる人物なるか其の風采挙動に就て之を察するに商人とも思われざれば又海外に赴任する官吏とも見えず多分自称政事家の飛あがりならん察する処近來田舎より出掛けて東京の紳士仲間と交際すれども英書と云えば変則にてリードルの一二巻とバーレーの万国史を二十ページ読みし位なるが近來頻りに洋行が流行し猫も杓子も先を争うて日本を飛出しヤレ倫敦はドウダの巴

里はシカジカと「シガアー」を吹き乍ら喋る立てざれば世間の受けが悪いにより自身も急に欧米漫遊を思い立ちしが話の出来ぬものが外国船に乗込むと百事不自由であるから程よく同行のある時を待つて乗船をするがよからんと勘むるものあれども此紳士の盲蛇を畏れずと云う喻えもあるが如く通弁があれば自分で語を覚ゆることが出来ぬナア人間であるからマンザラ迷子になり札付きで日本まで送り返される氣遣はあるまいと誰れが止めても聞き入れずトウトウ独りで万里の旅行を思い立ちしは無感覚か大胆か頗る剣呑至極の事どもなり果して紳士の乗船のときから自分の客室が無くて当惑を極めしが出船の際には随分泥棒が多くて荷物を失うことがあるから用心をせねばならぬと兼てより聞きしこともあれば手皮箱の上に腰を掛けてあたりをキョロキョロ見廻し乍らナンデモ此の船の中に誰れぞ日本人が居るに違ひ無いドウか見付け出して通弁を頼みたいものじゃ」と心の内にて勘考をなす所へ其の前を通りしは丈短く顔色黄にして髪の実黒なる男にて身形も相応に立派なれば「ヤレうれしや同国人が居ると早脚にて追掛け帽子を脱して礼を為し先生も御洋行でありますかと問えども此人は不思議そうに紳士の顔を眺めブウブウ何か云えども紳士には少しも分らず先生僕には英語が分らんと云えば此男は不規則なる日本語にて「私し魔尼羅です日本人ありません」と答てツカツカと行過たり

案ずるに魔尼羅は「ピリッピン」群島の都府なり此群島と現今西班牙に属す土人の容貌日

本に似たるもの少なからず

紳士は姑く失望の体なりしが甲板の上に粗末なる木綿洋服を着して立つものあり其顔顔を覗れば間違ひも通ぜず紳士は「此の日本人は啞と見える」と独りササヤキしが跡にて聞けば此男も魔尼羅人にて上等室にある西班牙人の従僕なりと早や十一時を過ぎ汽船は錨を揚げて徐々として運動を始め海上波静にして黒煙半空にあらが船客は孰れも甲板に出でて眺望すれども紳士は左ながら狂気の如く大枚二百弗を払ひてコンナ取扱を受けては割に合う話で無い詞が出来れば例の雄弁を揮うて船長以下をやり付て遣らんものをと齒を咬占めて居る処へ一人の支那人が英語にて何か話し掛れども紳士には少しも通ぜず支那人は手を引いて事務長の室と覺しき処へ案内し手真似にて書付を出せと云う様子なれば分らぬ乍らも洋服の隠しに入れ置きし「チツケット」を出して之を示せば事務長は図面に照らして番号を書き替へ「ボーイ」(給仕なり)に云付て二十号の室に案内し手荷物をも室内に持運べば紳士はホット一息して室内を見るに左の方に臥牀を吊して夫々臥具を備え右の方に立派な腰掛を置き中央に大なる棚ありて上はガラスの大鏡を掛け戸棚の蓋を開くれば大なる鉢あり鉄管の先より自在に流水を注射す舳内の上等室は都て二十にして此回の旅客は皆な西洋人にて家族を携帯するものを合せて二十七八名に過ぎざれば概ね一人にて一室を占め殊に紳士の室は甲板の上において一二等に位すれば紳士は急に得意

となり皮箱の中より「シガレット」を取出しスパスパ煙を吹き乍ら甲板の上を徜徉し「アア愉快の航海ジャ」

汽船発錨の際には非常の混雑によりて間違を生じ往々「チツケット」の番号に照らして室を尋ねれども既に人ありて入るを得ざることあり現に「ベルジック」号の如き洋人の船客も二三時間室を得ざりしものあり事務長は詰責を畏れ汽船の運動を始める前には深く隠れて出で来らず「チツケット」さえ買ひ置けば室を得ざる氣遣ひなし必ずしも此の紳士の如き失望を發するを要せざるべし

汽船の東京灣を出て房州の諸山を左舷に見て東に馳すれば紳士も甲板に出で遠目鏡を以て頻りに四方を眺むる内に階子段の下にてガランガランと金盞を敲く様な音が聞え甲板にある船客は皆なそろそろ舳内に入るにぞ紳士も何事ならんと後に付て一室を窺えば此処の食堂にて今午飯が始まると見え四カ処に「テーブル」を列べ山海の珍味を其上に羅列し船客も思い思い椅子に就け紳士の今朝未明に東京にて食事を為したることなれば此時早や余程空腹を感じ先刻から二三度も時計を眺めては午飯を待ち兼ねし所なれば是れは難有りと帽子を取ることも打忘れツカスカと室内に立ち入れば「チーフスチワルド」は一つの図面様のものを其前に差出せり紳士は何の訳だか少しも分らねども知った風に一寸一カ所を指せし此の図面の人々の選びによりて「テーブル」の順序を定むるものと見え「チーフスチワルド」はジャンジャン坊主の「ボー

イ」に言い付けて紳士を入口の右側にある「テーブル」に就かためたり此の「テーブル」は紳士三名貴女三人あり四カ所の「テーブル」とも船長事務長を始め船中の重役四人が一人ずつ主席にありて接待を為せり是時最初にスープが出で次に「ボーイ」は大きな鉢に牛の焼肉を盛つて差出し主席にある人は之を切り小さき皿に入れて一同に分配せり之を食い終れば洋紙に料理の品付を書いたものを出だせり洋人は男女とも勝手に己れの好むものを云ひ付て食う様子なれば紳士も負けぬ氣になり書付けを手に取り上げジロジロ眺むるに艸の様な草にて書き付てあれば一字も読めずパット顔を赤らめて当惑せしが知らぬと云うては恥辱なりと思ひナンデモ初めの方に書いてあるものから取寄せるが善からんとて第一番の文字を指させば後ろに立つ二人の「ボーイ」は笑ひ乍らコンコン話し合ひスープスプと小さき声にて云うにぞ紳士も是れは遣り損いしと氣が付き急に三四番目の処に指を当てれば「ボーイ」はフウフウ笑ひ暫くあつて紳士の前に持来りしは前に食ひし品と同じき牛の焼肉なれば紳士の穴にも入りたき程に思えども中々の強情ものなればワザと己れは是れが一番好物だから二皿食うのジャと云う様な顔付をなし平氣に小刀にて肉を切り割きムシヤムシヤ食い終りしが是れで止めては夕飯までこらえることが出来まいナア間違つたら夫れ迄のことだマア二三品やらかせと再び書き付て手に取りしが是れまでは初めの方へ指を差して失策をしたから今度は後の方が善からんと思ひ指の先

にてズット末の方を突けば「ボーイ」はチャチャチャと云て一杯の茶を持ち来るにぞ又間違つたかと独り笑いながら茶碗を抱つて飲み干せば非常の熱湯にて舌を擦き目を白黒し乍ら苦痛を忍び少し上の方を指せしが是れは菓子にてマダ一通りの食事も済まず菓物の出ぬ先に菓子を注文するは奇怪千万なれば「ボーイ」はハアハアハア笑い出し一つの卓子にある紳士貴女も皆ジロジロ紳士の顔を見れば紳士は溜り兼ね其の儘コソコソ己れの部屋へ逃げ帰ったり跡にて孰れも高声にて何か話し合ひ時々ジャパニース（日本人）と云う語の交るは此の紳士の馬鹿げたるを嘲るものと知られたり

夕景になれば船内各処に電気燈を点じて赫々たる白昼に異ならず既にして金盞ガンガン鳴り渡りて夕飯を報ずれば紳士は昼の失策に懲り洋人の紳士貴女に顔を見らるるが耻かしけれども長い航海に食事をせずに居る訳にも行かねば怖ながら食堂に出で又々色々の失策をヤラカシ乍ら沢山に肉や野菜を食ひ夫れから甲板の上を運動し室内に入つて書物を読み早や十一時過になり睡気を催したればイザ寢床に入らんと思ひベットを見れば白き綾織りの木綿の上に大きな枕を置きたれども上に掛ける蒲団が無ければ今に「ボーイ」が持ち運ぶならんと思ひ半分閉じ掛りし眼を開き今か今かと待てども音沙汰無し夜は更けるし体は寒くなるし紳士は不平で溜らずナンボ西洋人でも物も掛けずに寝ることはあるまいが此船では蒲団は自弁と見えるなケットを持て来なんだのは大失策であつたと独語乍ら

覚えズベットの上に倒れしが寒さに堪えずして目を覚しドウモ是れでは眠られん」と云いつつ室内に在る電信の呼鈴を押して「ボーイ」を呼びスベルの間違つたる英語にて蒲団を持て来いと云えども「ボーイ」には少しも分らず不規則の英語にて「お前の話しは私しには聞き取れんと云えども「ボーイ」の語も紳士には通せず啞の喧嘩の様に雙方フウフウ怒鳴る許りにて際限なければ紳士は手真似にて夜具の無きことを示せば「ボーイ」は稍其意を喻りウン是れがと云い乍ら綾木綿の蔽を開けば下には厚き敷蒲団がありて其上に二枚の綾木綿を以てケットを包みてあればヤット訳が分りて黙つて其中にもぐり込めば「ボーイ」はハアハア笑い入口の戸を占めて帰り去れり紳士はケットの中より頭を出だし馬鹿な支那人ジャ早やく訳を話せば己れは風を引くのでなかつたに」ハクション

此夜は快よく眠に就き翌朝八時頃になつて目が覚めしが頻に小便を催したり日本に居る時歐羅巴にて便処のありかを人に問うことは大失敬であること云うことを聞き伝えて居るにより昨日此船まで見送りに来たる人の内に一两年前米国より日本へ帰るときに此船に乗りし男のありしにより一番に其人に就て便所の所在を尋ねしが表の方の downstairs の側にありて穢なき戸を開けば板の間に幾つとも無く穴を鑿ち其状は丁度水車の臼の様に下等の支那人どもは相列んで大小便を為し汚水室内に溢れて履を湿し其穢なきこと名状すべからず紳士はドウモ不体哉な便処かなと思えども詮方なく嘔氣を忍んで度々此の廁

に上り乍ら氣を付けて見るに西洋人などの誰れも茲へ来るもの無くドウモ上等室の便処と思われざれば今朝起ると直ぐに部屋を飛び出で手真似にて「ボーイ」に便処の方角を問うに下の階子段を下り右の方の差詰のと云う様なれば急わしく其の処に至り一寸と戸を開て中を窺うに何に用うるものなるかは知らざれども石か陶器にて造りしと覺しき大きな卵形の湯槽の様なるものあり其側にあるはブリッキ製の小き器にて中に穢れたる水を貯うれば是れが上等室の便器に相違なしと自分で取極めシヤアシヤ其中に小便をして仕舞しが今向うの室の戸を開けて西洋人が立ち出でサツサツと向うの方へ行きしにより跡から其の室をさし覗けば此処が大小便所に相違なき様なればヨクヨク考へて見るに前に小便をした処は湯殿の様に思わるればイヤ是は又大失策をしたり見付られては大変と忙わしく其の処を立ち去り左あらぬ体にて階子段の上にたずみ居たるに一人の西洋人が手拭を携えて入浴に来りしかば可笑を耐えて様子を窺うに洋人は風呂から出て金盥にて手拭を洗いブンと臭氣の鼻に付くに驚き急に「ボーイ」を呼び付けプウプウ小言を云い水を酌み入れるやら其処を掃除するやら大騒動となりたり「ボーイ」も是れは何んでもアノ詞の分らぬ日本人のしたのであるうと思えども是れと云う証拠も無ければ蔭で不平を鳴らす迄にて済みしかば紳士は竊かに舌を出し己れの小便で西洋人に手拭を洗濯させてヤッタから妙だ」と独り得意の顔をなしたり昨日の失策から初めて船中に湯のあることを知

り其翌日の朝になり「ボーイ」を呼びBathありまするか」と問うに「あります」と答うれば寝衣のまま「ボーイ」に案内せられて湯殿に至るに昨日小便せし金盥も其処にあれば心の中にて笑乍ら卵形の湯槽の中を見れば底の方に二ツの穴がありブウブウ鳴り渡るのみにて一滴の水だも無し紳士の不審でたまらず早く湯を入れたく其の意を悟り湯槽の上にある二つの栓(一つは上)STEAMの字を識して蒸気を入れ一つはCOLDの字ありて水の注射する用に供せり)を引廻せば温湯忽ち穴の中より沸々として飛騰し既に半分計りにもなりしを以て衣裳を解き忙おしく湯の中に飛び入りしに上の方許り微温にして底は全く冷水なれば紳士は胆を潰しCOLDと喚びしが「ボーイ」は此上冷くせよと命ぜしと思ひ再び水を入れる方の栓を引廻し其儘表の戸を閉て何処へか出で往きたり紳士は今に湯が出るかと思つて待つ処に忽ち冷水が注射するにぞ覺えず身を震はし室内に電信の呼鈴あるにも気が付かず「ボーイボーイ」と大呼すれど戸が閉たれば外に聞えずブルブル震えながら湯の中を飛び出したるが水を注射する栓を開きしままに閉ずることを知らねば見る間に水は忽ち槽中に溢れて室内に流れ出れば紳士は驚いて騒ぎ廻り其処の椅子に掛けたる衣裳腹帯などもパツタリ水の上に落ち尽く濡れて仕舞ひが紳士は途方にくれ赤体の儘室内を飛び出す処へ丁度「ボーイ」が来合せて急ぎ水を止めたれば紳士の真赤な顔を為し再三「ボーイ」に謝罪し散々

の態にて己れの部屋に逃げ帰りたり紳士は下等室に四五名の日本人あることを知りしかば退屈の余り暗黒世界と云うべき所に至り見るに此室の前左右は皆な米國へ出稼ぎする支那人にて其人数は幾百人とも知れず三四重につるしたる小き棚の上に豚の様に寝ころぶものあれば破れ衣裳を着し垢じみたる帽子を被り此処彼処に群を為して阿片を吸ひ博奕を闘わすものあり其不体裁なること名状すべからず米國にて支那人の渡来を嫌ひ之を拒絶せんとするも無理ならぬことと紳士も頻りに歎息せり下等室にある人々は紳士の上等室にあるを以て定めて相応なる官員にてもあらんと思ひ先生と云つて尊敬せらるるにぞ紳士は詞が分らずして西洋人の中に交り朝夕窮屈でたまらねば爰が自分の鼻を高くする場所と思ひ髻を捻りながら頻りに知らぬことを喋舌り散らして居る処へ丁度差向いの室にて何かブウブウ声高に言い争う様子なりしが忽ち一人の日本人が一般に此室に逃げ入ると誰とも知らず後から追駈けて来り棒にてコツンと紳士の頭を敲きたり己れ失敬の奴と云うまま引捕えんとするに粗末の衣裳を衣たる支那の婦人なれば手荒きことも出来ず其儘室の外へ突出し逃げ来りし男に向うて訳を問うに此船に三人の支那婦人と日本の婦人が乗り込み一つの部屋に居れば女好きの支那人や日本の書生などは交る交る此の部屋に入り込んで女に戯れしが此日支那の婦人が衣裳を着換へんとする処へ書生が往きかかりしにより外へ出よと二三度も手真似をなせども書生は面白半分にかからかい一

寸と衣裳のスソを引きしかば婦人は大に怒り傍らにある棒を取て立ちあがりしかば書生は驚いて己れの部屋へ逃げ来りしに中々氣象の強き婦人と見え何やらブウブウ云ひ乍ら追つ駈けて来り戸の側に立ちたる紳士を今の書生と取違えて頭をナグリしと云うことが分りたれば紳士は頭を撫で乍ら女の乏しい船中であるから十人並の顔付きなら敵かたしいイがアノお化の様でお負にブンと臭のする支那の婦人ではあり難くないと云えば一同大笑となりたり

毎日海上晴れ渡りて風波も静かなれば上等船客は甲板の上を運動し又は吸烟室に集りて談話を為し又は「カード」を闘して長き航海の無聊を慰めり紳士は一つも外国語を知らぬゆえ乗船の当分は体を小さくして隅の方にのみ居りしが次第に懇意になつて見れば外国人の内には久しく横浜に居りて日本語を知るものあれば一通りの話も出来百事都合よくなりたり或る日一人の西洋人が紳士の部屋の前を通り戸の半分開たるを見て中へ立ち入り不規則なる日本語にて四方八方の話をしし乍らキョロキョロ室内を見廻し「コソ沢山ヨゴレて居ります」「ボーイ」来ませんかアナタ靴磨てありません」と云えば紳士は「ボーイ」些とも来ません掃除一度もしたことはありませんと答えたり元来上等室へは毎朝「ボーイ」が来て夜具を仕舞い便器を洗い瓶中に水を入れて奇麗に室内を掃除し船客が靴を戸の外に出し置くときは之を磨き立てる規則なるに此室のみは夜具も寝台の上に散乱して床下の埃だらけなるは不審の事なり定めて紳士の詞が分ら

ぬにつけ込み馬鹿にして懶惰^{なまけ}ならんと思ひ洋人の再び紳士に向い「ボーイ」心得よくありません私沢山叱りましょうと云いつつ呼鈴を推して「ボーイ」を呼び頻りに小言を云ひ姑く何か問答せし様子なりしが再び紳士に向い「アナタボーイ^{おかし}藏^{くら}きましたそれでボーイ来ませんと不審そうなる顔付きにて其訳を詰問すれば紳士も今更包み隠すことが出来ず実は以前洋行せしものより船中にて支那人はヨク盗みをするにより気を付けよと注意をしてくれしことがありしが乗船の翌朝雪隠より帰えりて見れば一人の支那人が自分の部屋に居る故定めて何かを盗みに来りしならんと思ひ大声を上げて叱り付けしに却て彼れより何か理窟を云う様子なれば腹立ちまぎれに二ツ三ツ頭をナグリしかば支那人は驚いて逃げ去り其後は一度も部屋へ来りしことなき由を話せば西洋人は余りの可笑^{おか}さに吹き出だし泥棒ありませんアナタボーイの頭たたくよろしうないと云われて紳士は面目なく洋人の帰つた跡にて二三弗のメキシコ銀を紙に包みボーイを呼び手真似にて先日の間違ひを謝しソツト金を渡せば元米唾を吐きかけられても金さえ見れば笑顔をする支那人のことなれば紙包を掌に載せて一寸と重さを量りニッコリとして紳士の顔を覗い「サンキウ」難有とうと云いつつ前に進んで手を握りドウカ此の上タント頭を敲いて下さいと云わぬ許りの顔付にて立ち帰りたり

今日も朝飯が済み多人数吸烟室に集り彼処此処のテーブルを繞りて頻りにカードを闘わせば紳士もシガレットを吸い乍ら側の椅子に掛けて傍観して居たるが一人の西洋人は手真似にて君も仲間に入らんかと勧める様子なり紳士は詞が出来ぬからドンナ面白うなことがあつてもボンヤリと啞の様な風をして居らねばならず自分の退窟は云う迄も無く余ツ程馬鹿げて見ゆるに相違なしと思う所なれば以前東京にて時々朋達とカードを闘わし下手乍ら筋道だけは覚えて居るにより負けたとて損の行くこともあるまいイツマデも仲間離れをして居ると大勢に擯斥せらるるから遣て見るが善かろうと非常に奮発心を起こし私カード知て居ります」と云ひ乍ら其処へ出掛け四人差向いにて手合を始めたなり紳士も初めは運が善く「トランプ」や「キング」「クイン」の札が沢山に手に入りたれば左まで失敗もせざりしかば得意になつてやり付けしが元来十分に熟練のなきことなれば次第次第に負けが重り自分と取組の西洋人はブツブツ腹を立て「アナタ下手いけません」と頻りに小言を云ひ十五度ばかりの手合せにて止めになりたり前より傍にある男は手帳に勝負を記しコンデンスミルクの罐を丸く切て貨幣の形にしたるものを彼此に分配し今や此方には一枚も無くなりて向うには十四五枚も集りし模様なりしが紳士は初めより金が掛けてあるとも知らず負け腹を立て悔しうなる顔付にてツツ椅子を離れ部屋へ帰らんとするに相手の西洋人が忙わしく何か声を掛けけれど紳士には其意味が通ぜぬにより手を揮り乍ら立ち去らんとすれば西洋人は急に袖を引き留め如何にも熱心なる顔付きにて二本指を出だし又指にて円形を成して之を示せしによりサテは金

が掛けてあつて二円負けたと見える馬鹿馬鹿しいと独り小言を云ひ乍ら洋服の隠しよりメキシコ弗二枚を出して之を与うるに西洋人は頭を揮り乍らノウノウトエンチードルラルスと再三繰り返すにぞ紳士も始て其意を解しジブジブ乍ら手をチョッキの下に入れ腹巻の中より米金二十弗を取り出してテーブルの上に投げ出し逃げる様に部屋へ帰り詞の分らん癖にメツタなことをするものでは無いウカウカすると船中の用意金を巻き揚げられる処であつたドウモ西洋人は狡猾ジヤ掛けながら掛と前から云えばイイにイヤ云つたかも知れんが此方に詞が分らんから仕方がない何様是れジャヤ不用心千万ジヤ横濱を出でしより十日許り海上殊の外安穩なりしが亜米利加大陸に近くに従ひ北風吹起つて波浪山の如くなりしかば誰も甲板に出るもの無く紳士は極て船に弱き方なれども幸に是まで風波の静かなりしを以て一度も船に酔いしことなかりしに今日は何となく気分あしく食事の時の舟の揺動すること甚しければ洋服を解いて寢衣になりベットのの上に臥せしが胸が悪くして少しく嘔気を催うせし様なればボーイを呼び「ビール」を取寄せ二三本も傾けしかば夜に入り頻りに小便を催せり宵の中から寢衣のままで部屋を出るは不体裁なり便処に往く度に衣裳を衣替ることも面倒なり其上起き出ずればヒョロヒョロとして足が定まらず是非なく室内に備えてある便器を箱の中より出しては小用を弁ぜり元来室内の便器は毎朝ボーイが来つて汚物を他の桶

に移し綺麗に掃除するが通常なれども紳士は兩三日前まで室内に便器のあることを知らず此頃になって初めて気が付き其の上日本人の常として部屋の中でヤラカスのは何と無く心持ちが悪く夜中でもワザワザ便処へ往きたり「ボーイ」は何時箱の蓋を明けて見ても汚物がなければ此の室の便器は掃除するに及ばぬことと極めて居たりしが紳士はドウ云う都合か前夜両度まで便器の中へ沢山ヤラカしたれども「ボーイ」は気が付かず其儘に為し置きたる上今朝から三四度もヒリ込みしことなれば早七分も満ちとしたるを別に不用心とも思わず脚のヒョロヒョロするまま便器を箱の中へ押し込み蓋をして寝入りしが風は次第に烈しくなり差しもの大船も右に動き左に傾き棚に載せ置きたる品物もゴトゴト跳り出して床の上に墜つる程なれば紳士はケツトを被りて寝台の上に臥し目が覚めては又眠り夢の様にゴウゴウ鳴り渡る風濤の声を聞き居たるがフト悪るぐさき臭気の鼻に付きしかば醜な眼を開いて寝台の下を眺むるに沢山に水が流れ船の動く毎に右に注ぎ左に集るを視て吃驚しサテは窓の透より潮が打ち込みしならんと思ひ水の上に落て其所らを転げ廻る器物を取り上げんと思ひ寝台の上より飛び下りれば船の動く勢にバツタリ其処へ倒れ「フランネル」の寝衣のピツシヨリ水にぬれ嫌な臭気の鼻を衝く様なれば能く気を付けて見るに全く箱の中にある便器の小便が流れ出でしに相違なければ紳士は顔をシカメて独り小言を云えども誰れも相手になるもの無く先ず自分の小便なれば善い様なものの

何だか心持が悪るければ水にて体を洗ひトランクを開いて寝衣を衣替などする内に早夜は明け渡りチンチン時計が六時を報ずれば紳士は西洋人などの起き出でる前に始末を付けぬと不都合ならんと思ひチンと呼鈴を押せば程無く「ボーイ」はゴトゴト外から戸を敲き半分許り開いて頭を室内に出し鼻を摘んで「クサイクサイ」と云うにぞ紳士は真赤な顔をして便器の入れてある箱の方を指さし此処から小便がこぼれたと云う手真似を為し「メキシコ」銀一弗を取り出して与うればボーイは笑ひ乍ら再三謝詞を述べ「アナタもうBaggy出来ましたと云えば紳士は心の中にナル程金さえあれば小便の失策も水に流すことが出来る」ボーイは金を手握りながらパアパア支那語にて喋舌りしは此大馬鹿ものめ寝台の上へ糞をたればよいそうすると直に二三弗儲けることが出来ると云いしなるべし然れど紳士には少しも分らず生意気に此節キカジツタ英語を遣ひ「エース」ボーイ「ハハハハハ」汽船は益々東に向うて馳せ明日桑港に達する日取となりしかば船客一同上陸の用意を為す内に事務長は税関を過るときに調査に備うる刷物を出して一同に分配せしが紳士は之を一読すれども十分に意味が分らず日本語の出来る洋人に就きて聞き合すに所持の荷物の中に有税品があれば代価を書き入れて置かねばならぬ規則なりと答えたり紳士は外国への土産に若干の金銀細工や帛物などを買求めて「カベン」の内にに入れて置きしがなんでも此の刷物には売物に税を掛る」とある様なれば先ず安心なり其上先頃米国か

ら帰りた人より「サンフランシスコ」の税関は随分賄賂が行われ調査の役人に二弗か三弗位も握らせればサツサツと通り過ぎることが出来ると聞きしかば十分に詞の出来ぬ癖に甘くゴマカス気になり一ツも有税品のなき様に紙面に記載したるこそ大胆なれ

日本海を離れしより目に触るる処は千里渺茫たる波浪と船を追うて飛ぶ海鷗のみにて外に見るものは一ツも無ければ孰れも殊の外退屈せしが十六日目の曉方になり甲板の上が頻りに騒がしくなりしかば紳士も起き出で寝衣の上に外套を引掛け寒を忍んで甲板に出ずれば群山曉霧の間に出没して汽船は既に桑港の湾口に向うて進入せり精神の爽快なる喩うるに物なく頻りに遠目鏡を携えて四方を眺望する内に紅日東天に出でたり既にして汽船は桑港に入りて税関の前に進めば船客一同荷物を取片付け「ボーイ」に荷物を運ばせ続々として税関の調査場の上陸せり

(明治二十一年)

さぶ波日記

巖谷 小波

九月二十二日（土曜）曇晴 時々雨

昨夜は流石に寝心が悪かつたが、それでも四五日以来の疲労で、四時間計りは前後も知らず、三一（出発前十日に初めて産まれた男の子）が乳を求める声に夢を破られて、目が覚めたのは午前四時半、直ぐに起きて手水を使ひ、それから新聞を見て居る中に、石橋思案君も二階から起きて来た。君は吾を送る為めに、昨夜から泊まり込んだのである。

朝飯を済まして身支度に取かかる処へ、近所に居る両親、兄弟、姉妹、甥姪などが、打連れて告別に来たから、それに一々暇を告げ、例の思案君、親友の加藤晴比古君、武内桂舟君、生田葵山人、及二人の弟等に擁せられて、新橋停車場へと向つた。荷物は但し先へ廻はしたのである。

停車場にははや見送りの諸君が、中等室に溢れて居る。それも其筈、今度は外国語学校の山口教授、高田商会の志保井君が、同じ船に乗り込むので、而も両君共、同じ時間に新橋を出る

のであるから、只さへ広く無いプラットホームは、三方面の見送人の為めに、忽ち黒山を築いて、誰が誰やら殆んど解らぬ位。殊に胸は一種の感に撃たれて、視覚も何うやら定まり兼ねる折から、定めし碌に挨拶もしなかつたのがあらう。さう云ふ方々には、改めて此処にお詫をしておく。

六時五十分には新橋を出て、八時前にはもう横浜の波止場へ来た。全体ならば今度の船は、此処の棧橋に着く筈であるが、水が浅いのに船が大きいため、生憎横附と云ふ訳に行かないで、矢張り小蒸汽に送られて、十分計りで本船へ来た。その前丁度棧橋の処で、桜井鷗村君の祝電を受取つた。初航海の首途に『初航海』著者からの祝電、これも何かの因縁であらう。

船は独逸ロイド会社の、ハンブルヒ号と云ふので、長さが五百五十呎、幅が六十呎、噸数一万と云ふ大船。これならどんな波が来ても大丈夫だと、見送に来てくれた人々が、何れも舌を捲きながら、吾が前途を祝してくれた。

乗組んだのが、八時過で、出帆が九時と云ふのだから、折角此処まで見送つてくれた人々と、ゆるゆる別杯を挙げる間も無く、甲板で一々手を握つて、やがて袂を別つたのである。

吾は甲板に、人々は船に、上と下とで、ます帽子、振る手巾……次第に間は隔たつて行く……。

おさらばや霧に隔たる帽の数
名残はなかなか尽きぬけれど、さて長くは見居られない。吾は急いで、取あへず室へ入つ

た。室は四百〇一号と云ふので、中等では先好い所。同室は例の山口小太郎君、日本の語学校の独逸語の教授と、独逸の語学校の日本語の教師が、同船同室に落ち合ふのも、何と不思議な縁ではないか。

手廻りの荷物を整理して、再び甲板に上つて見ると、恰も此方の梯子を離れて、今帰らうとする船がある。不図見ればその中に、高山文学士と岡田法学士が居る（後には両君とも博士）。高山君はわざわざ平塚から、病を推して見送に來られ、また岡田君はつい一月程前に、外国から帰朝されたので、船中及途中の注意を、覚書にして持つて來られたのであるが、共に時間が後れたので、吾と船中に会ふ事が出来ず、空しく引返さうとする所を、運好く吾の見付けたので、もう声は通じなかつたが、それでも互ひに顔だけは、見もし見られもする事が出来た。（此時岡田君の覚書は、船長に托して行かれたのを、後にて受取る事が出来た）。

午前九時、汽笛一声、暫時の別離と見渡す神奈川台は、靜にその位置を転じた。否、船は進行を初めたのである。

用意の籐椅子を甲板に据ゑて、靜かに之に憑れて見たが、さてあまり心地はよく無い。その中に小雨が降り出して、風さへ之に加つたから、急いで喫煙室へ逃げ込んで、此処で山口志保井の二君と、談話を時を移す中に、スチュアード（給仕）がサンドキツチに牛茶を持つて来た。それが十時頃の事で、十二時にはベルが鳴り、その二度目に食堂に入つたが、船客はまだ至つ

へ入った。

すると間も無く音楽が初まつた。この音楽は蓋し独逸船の特色なので、日に何度となく演奏しては、旅客の無聊を慰めるのだ。尤もそれは、別に楽隊があるのでは無く、例のスチュアード連が、その用事の暇な時に、これは早変りをするのである。

吾はその音楽を聞きながら、静かに枕に就いて居る中に、何時かももう正体は無かつた。その夜の夢！親か友か、妻か子か……その実一向記憶の無いのを見ると、矢張り何処かにのんきな所もあつた。

同 二十三日（日曜、秋季皇霊祭）雨

六時に起きて手水をしまひ、甲板へ運動に出たが、雨で思ふ様に歩行けないから、喫煙室にブラ付いて居ると、スチュアードはモーゲン（お早う）と云ひながら、此処へコーヒと菓子パンを持つて来た。

——船は今紀州沖を通つて居る。

此の喫煙室で、この船の図のある画葉書売るから、取あへずそれを買ひ込んで、頻りに手紙を書き初めた。この中にベルが鳴つて、朝飯だと知らせに來たが、コーヒで腹が満ち成つて居たから、もう食堂へは出ずに済ました。

午前十一時神戸着。全体なら此の港に、一昼夜碇泊する筈であるから、その間に京都へ行つて、祖母や兄の墓参もし、又其地の友人達の開いてくれる、送別会へもゆつくり出やうと思つたのに、船長の意地悪さ、今夜の十時には出帆

するから、それ迄に歸つて来いと云ふ。

これにはすつかり目算が外れて、吾は大きに面食つたが、何しろ兼ての約束だから、行かない訳には出来ない、急いで船を上つて、急いで停車場へ駆け付けやうとすると、向ふの税関の見張所から、コロコロと云ふ大喝。慌てゝ引返へして、慌てゝ荷物を見せて、やつと無事に通された。まだ日本の中に居るのに、日本人が日本の税関で咎められるなどは、御念の入つた次第だと、此処は痛入らざるを得ない。

三宮を十二時十二分発の汽車で、吾は京都へ、山口君は大阪へと向つた。京都に着いたのは二時半、直ぐに車を飛ばして、花見小路の万花園へ行くと、此処に日出、京都両新聞の連中に、此地の知友二十人計り、折からの雁来紅を下物に、吾が為めに宴を張つて、大いに行を壮んにしてくれたが、憾むらくは、例の時間の切迫して居るで、席にある事たつた二時間、後れて出席の人々には、ほんの十分は言葉交はして、再び停車場へ引返へしたので、柳原伯、国松子などは、わざ／＼此処まで出向はれて、こゝのプラットホームでの立話、名残は何でこれに尽きよう。

あまりの名残惜さに、堀江松華、森愛軒、谷村伴鶴の三君は、せめて国境まで君を送らうと、其儘同車して山崎まで来、こゝで初めて別を告げた。時に日は半ば暮れて、雨はまた一トしきり。

秋雨のさらでも湿るゝ袂かな

て少数で、男女老若共に十名計り。主人席に事務長が着くと、それから左側の大きな仏蘭西人、次が志保井君山口君、それから子持の亜米利加婦人、次が八歳計りの男の子に、その阿父さんのデンマルクの紳士、その隣がまた男の子、又右側は、露西亞人の学生に、亜米利加の宣教師夫婦、その隣が吾で、次がデンマルク人の娘の四歳計りの、それからその阿母さんである。

昼の食事は、スープ共四品に、菓子と果物とコーヒが付くのだが、何しろ皆辛口なので、初度は少し避易する。

食後甲板を散歩したが、空は段々曇つて、動もすれば小雨が吹きつけるので、再び船室に入つてしまつた。

が、雨は只空計りでは無い。動もすれば我が胸は、裏からこそぐられる様に成つて、その度に露は踵を閉ぢやうとする。嗚呼吾は白状する、この第一日は全く悲しかつた、全く心細かつた。思へば吾が十一歳の時、初めて塾へ入られて、一日泣いて居た事があるが、吾は其後二十年目で、再びその涙を覚えたのである。

当年取つて三十一歳のをぢさん、カラ意気地の無い話であるが、しかし吾も人間である以上、どうも涙を持たずには居られない。ああ両親！あゝ同胞！あゝ親友！あゝ妻子！あゝ吾が家！あゝ吾が国！……そしてあゝわが少年諸君！それで一日元気が無かつた上に、船はそろそろ遠州灘にかゝつて、少しは動揺を初めたので、折角の晩餐もあまり進まず、八時にはもう寢床